**週刊やすいゆたか100号13年９月５日**

**百号記念放談ー質問　淀川穣治**

**第一回　『ビジネスマンのための西田哲学入門』**

淀川ーこのたびは「週刊やすいゆたか」が記念すべき百号をお迎えになったそうで、まことにおめでとうございます。



やすい丨ありがとうございます。片手間でやっているものですから、編集方針もへったくれもなく、近況報告、時事評論、最近の論考の紹介とか、やってきました。今後共、あまり枠をはめないで、粘り強くアピールしていきますのでよろしくおねがいします。

淀川ー私はやすいさんの自分史の聞き手ということですが、今日は、現在進行形の〈やすいゆたか〉の生の声を聞こうという企画でまいります。

一番ホットなやすいゆたかニュースはやはり『ビジネスマンのための西田哲学入門』の『プロメテウスー新時代への知の総合サイト』への掲載が完了したことでしょうか。

やすいーええ、二年かかりましたね。二年前に日本生産性本部にあります**野中郁次郎先生主幹**の「経営革新研究会」で、西田哲学の純粋経験と場所の論理についてわかりやすく説明してほしいと呼ばれまして、ビジネスマンが西田哲学を求めていることを知りました。それでビジネスマン向けの西田哲学入門を書いたわけです。

淀川ーふつうビジネスマンの哲学といえばプラグマティズムということになりそうですが、西田哲学で経営するなどなかなか変わった発想ですね。

やすいー経営学という分野は、使えそうなものがあれば何でも一度は使ってみるわけです。たとえば新素材をつくるのに、どういう比率で材料を混ぜあわせれば一番目的に合う素材ができるかは、やってみなければわからないので、かたっぱしからやってみて、一番いいのができたらそれを採用するわけです。野中先生の場合は、SECI理論を説明するのに必要だったわけですね。

淀川ービジネスに応用出来る形で説明できたのですか？やすいさんはビジネス経験はないでしょう。

やすいー少人数制の塾経営を細々としていたことがあるくらいですかね。中二クラスなど十人定員なのに、そのうちの半分以上が休み時間中に集団万引き事件を起こしまして、退塾させたので、収入が激減し、アップアップだったことがあります。世間でもビジネスといっても華々しい成功というのは少ないので、利殖のためのノウハウ本はまさか西田哲学に期待されないでしょう。

淀川ープラグマティズムより西田哲学の方が儲かる方法が書いてあると期待する人もいるとおもいますよ。  
  
やすいーもちろん絶対無の自覚にたって、心をまっさらにしたり、「物となって見、物となって行う」という発想でいけば、どんどんクリエイティブなアイデアが湧きだして来るはずです。

淀川ーやすいさんが、**梯明秀**の『経済哲学原理』を発展させる方向とは逆の西田哲学への回帰という立場になっていて、後ろ向きではないかという批判があるのではないですか？



やすいーそれはどうでしょう。イデオロギー的に右は反動、左は進歩という価値付けで評価するからそういう発想になるので、西田哲学というのは、ある意味、極北の北極星のようなもので、三木清も、梯明秀も結局それぞれに自分なりの西田解釈をしてきたといえるのかもしれません。だから私が西田哲学にある意味回帰しているように見えても、それは三木や梯の試みを発展させていることになるかもしれないわけです。

淀川ーやすいさんは西田の戦争責任問題に関しては、京都学派に対して同情的な哲学研究者が多い中でかなりシビアな見方をされていますね。

やすいーええ、蓑田胸喜らの皇道哲学がいわば原理主義的に天皇一元主義みたいな立場から、理性批判、哲学批判、科学批判で西田哲学を敵の本丸みたいに攻めたわけですね。それで西田哲学は、軍国主義に精一杯抵抗していたのだという、見直し論が出てきたのです。

淀川ー八紘一宇や東亜協同体とか言っていても、それは反帝国主義が前提だから、軍国主義的ではないとか擁護しますね。当時は、右翼からのテロが怖かったし、天皇中心とか戦意高揚を唱えなければ逆臣・国賊・非国民みたいに言われたものだから、ある程度、そういう言葉が入っていても論旨は、軍部の侵略主義を抑制する立場だと抵抗として評価できるということでしょう。

やすいーそういう面があることは否定できないけれど、それじゃあ西田幾多郎自身、三木清自身は本音では戦争に反対していたのだろうか、あるいは国際連盟の勧告に従って満蒙から撤退すべきだと考えていたのだろうかということですね。  
  
淀川ーなるほど、そうなると当時の知識人は共産党以外は微妙ですね。朝鮮の併合は、日本が支配してやらないと朝鮮人には統治能力がないと思っていた人が多いようですね。今でもそういう視点から、日本が半島の近代化に貢献したことを強調する人が多いです。  
  
やすいーましてや日露戦争は、日本が清國に代わって、ロシアを満州から追い出したのだから、満蒙における日本の特権は譲れないということでしょう。

淀川ー国民党の北伐が成功すると当然中国としては民族的主権の回復の観点から、満蒙の日本権益をなくそうとしてきます。ですからそれ以前から田中義一内閣は東方会議で、満蒙の権益を守るためには、満蒙を中国から切り離す事も辞さないとしました。

やすいーええ、北伐途中で一時引退していた蔣介石が日本にいて、田中と何やら密約したらしい。張作霖爆殺の際、蔣介石は怒るどころか、喜んでいたそうです。つまり蔣介石は、北伐統一を日本に邪魔させない代わりに当面は、満蒙権益には手を付けないし、日本とは戦わないという方針だったわけです。  
  
淀川ーええ、共産党を滅ぼしてから、日本に当たろうということですね。ところが西安事件で張学良に捕囚されて、抗日民族統一戦線、第二次国共合作になって日本と戦わざるをえなくなった。

やすいーつまり日本の帝国主義の論理というのは、弱肉強食ではないのです。もちろん露骨に弱肉強食でいけばいいという福沢諭吉みたいな論者もいたけれど、あくまでも東アジアの近代化、欧米支配からの脱却に誠心誠意であたっていく、日本の権益というのも決して日本のためだけのものではなく、東アジアの近代化のためのもので、公明正大なものなのだという論理です。  
  
淀川ーええ？やすいさんも右傾化されたのですか？

やすいーいいえ、西田の『日本文化の問題』を繰り返し読んでいくうちに見えてきた西田たちの真情ですね。なぜ戦争に参画していったかという論理です。日本は富国強兵・殖産興業で急速に近代化をとげたわけですが、中国は軍閥の抗争でなかなかまとまらない、それで中国革命を進めている孫文や蔣介石に日本の政界や財界や運動家は力を貸して来たわけですね。

淀川ー日本の政権はむしろ袁世凱や段祺瑞、さらには張作霖など深い関係をつくって、中国での帝国主義的権益を広げようとしていたのでしょう。国民党による統一中華の実現を妨げようとしていました。

やすいーええ、実態はそうですが、統一中華が出来上がる前に満蒙の権益を確保したかったのでしょうね。そこに五族協和の理想郷を作って、中国近代化、ひいては東アジア統合の見本をつくろうと考えていた。ロシアの南下を阻止した日本にはそれだけの特権が当然あるだろうという考えですね。

淀川ー中国にすれば、日本も中国を侵略支配しにきているわけで、日本に居座られるのは迷惑ですね。  
  
やすいーそれは民族自決の考えです。　ロシアの南下を防いだのは誰だ、わざわざ満州まででかけて父祖の血を流した日本じゃないのかということですね。その恩を忘れて、南満州鉄道に対抗する鉄道を敷こうとしていたわけで、到底許せないというのが、関東軍です。それは日露戦争で血を流した軍人たちの遺族の思いでもあったでしょう。

淀川ーそう言えば、西田の弟も旅順の攻防で戦死していますね。しかしそういう遺族の真情みたいなのに寄りかかったら、冷静に時代を読めないですよね。やはり満蒙を中国から切り離すのはどうみても帝国主義の植民地分割です。  
  
やすいー全くその通りです。国民党が北伐に成功した後、中国近代化を成し遂げるためには東北部(満州)は中国にとって不可欠ですから、日本の特権はなんとしても回収しなければならないのです。もし日本の言い分を認めれば、日本は先進工業地帯になった満州を拠点に、南進をはかろうとするのではないかと中国人民は考えていたわけです。

淀川ーだから満州事変で占領して、満州国を立てたりするのはとんでもないことで、国際連盟の勧告通り撤兵すべきだったのですね。ところが満蒙は日本の生命線でそこを失うと、ブロック経済がつくれないから、日本経済が破綻すると考えたのでしょう。

やすいーええ、そこが大きな間違いでしたね。やはり発想が帝国主義なのです。国民党の統一中国ができても、近代化を図るためには、欧米や日本の経済的な投資が不可欠です。すでに孫文は、孫文学説で欧米の資本主義が中国の社会主義を建設すると唱えています。世界には余剰な資本があり、中国には資源と労働力があるので、国家が土地に課税することによって、近代化による土地の値上がりが国家資本を蓄積して、国家主導の工業化が進展するという学説です。

淀川ーともかく文革以降の改革開放みたいなことを中国側は考えていた、もちろん満州への投資を進めていた日本はどんどん資本進出できたはずだということですね。

やすいー百万人の日本軍のもとでの進出ならいかにも植民地化ですが、日本軍が引き上げて、合弁や民間資本の進出は、労働条件などで制約を設けることで、中国経済の自立的な発達を援助することになります。また日本資本にとっても巨大な市場が生まれることになり、発展することができたでしょう。大東亜戦争必然論など戦争の合理化にすぎないのです。  
  
淀川ーそれなら、結局戦争協力してしまった西田哲学に何故そんなに傾倒されるのですか。

やすいーどんな哲学だって、それを生み出した人はその時代に生きて、その時代の感情を生きるしかありません。日本の意図を帝国主義的な支配欲や利殖欲として悪意にばかり解釈する中国や朝鮮の人々に対して、あくまでも歴史の発展、東アジアの解放という世界史的な使命に基づくものであり、物事の道理にそったものであると思いたかったわけですね。  
  
淀川ーでもそうじゃなかった。  
やすいーだから東アジアの解放のため、東亜の協同のために、本当の意味で「物の真実に行く」　ことはどういうことだったのか考えると、それは現在の日中韓の問題を考える場合に大いに参考になるでしょう。  
  
淀川ー今や関係が冷えきってしまっていて、このままでは、東アジア協同体なんて進展しそうもありませんね。

やすいー関係が悪化してこじれると国際分業にも支障が出ますから、このグローバル化の時代に東アジアが沈没するというシナリオになりかねません。その意味で、もう一度東アジア共同体の旗を降る必要があります。でも歴史認識で、歴史修正主義的な言動がぶり返される限り、ますます険悪になるしかないわけです。

淀川ーそれで何故、歴史修正主義が出てくるかということで、それはやはり日本は、公明正大に物の真実を行っていたと主観的に考えていたのは何故か解明して、そのどこが誤りだったか確認しておく必要があるということですね。  
  
やすいーその意味でも西田哲学の批判的継承が必要だということですね。　　　　**つづく**